

「生々流転」誕生 100 周年記念展

◎ 《生々流転》と大正期の大観

大正期、大観は名実ともに日本画の大家となりました。気力も充実し、大作を次々に発表して画壇の注目を集めていきました。なかでも代表的な作品は《生々流転》（大正 12 年、重要文化財）です。これは万物の移りゆく姿を水の流れるにたとえた絵巻で、その長さは 40m、通常の 4~5 倍というスケールです。再興第 10 回日本美術院展に出品されたこの大作は、現在、東京国立近代美術館の所蔵となっており、このたび当館にて展示するのは、その未完本（完成に至らなかったもの）です。本番さながらに描かれたこれら未完本の数々からは、本大作への大観の意気込みが感じられます。

《生々流転》は、さまざまな表現技法を駆使した、大観の水墨表現の集大成ともいえる作品です。自由闊達な筆さばきによる山水の自然美、そして、ぼかしの広がる抽象的な世界へ。画面はドラマチックに展開します。表現への飽くなき探求は墨にも及びました。本作品では程君房（ていくんぼう）製（中国明代の墨匠）の「鯨柱墨（げいちゅうぼく）」という青墨（青味を帯びた墨）が用いられています。こうした骨董的価値を有する名墨を画材として使用した例は、過去にはなかったのですが、大観にとっては、画材として活かされてこそ、その価値は発揮されるものでした。

大観は、「墨には五彩がありと申すが、墨はたゞ黒一色でありながら其中には濃淡濁潤の千変万化があり、これが色彩以上の複雑さを現はして、色彩を超絶したる実在感を端的に微妙に表現するのである。」（「日本美術の精神」『改造』昭和 14 年 6 月）と述べているように、墨のなかに、あらゆる色彩を想像できるのだと説いています。明代の青墨をもちいて、大観は、西洋絵画の写実をしのぐ、東洋美術の古典的な気品、風格を表現していきました。

《生々流転》に例を見るように、大正後期はとくに、水墨の端麗で細密な描写が特徴的で、自然観察に集中していくさまがうかがわれます。その後、戦争の時代に突入すると、その作風をガラッと変え、凜とした力強さを手に入れていくこととなります。



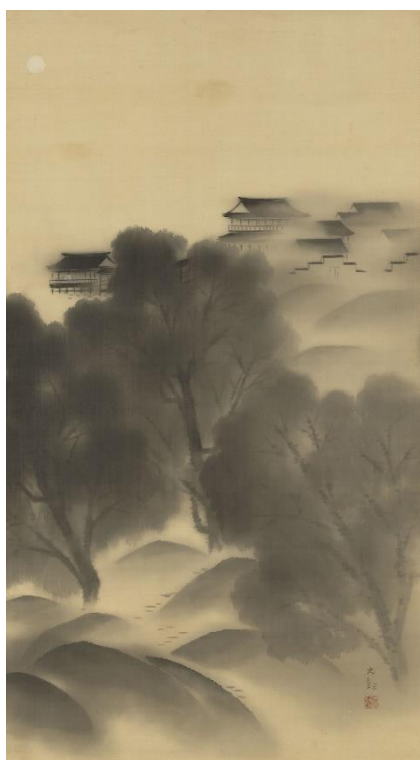
◎展示作品解説

《生々流転》(未完) 大正 12 年/ 1923 横山大観記念館蔵

本作品は、画卷《生々流転》(重要文化財)の制作過程で生じた未完本です。

画面は霧の煙る神秘的な光景から始まります。深山の細々とした清流は、川幅をひろげつつ人里へ。薪を運ぶ樵人、筏で川を下る人、漁夫など、自然のなかで生活を営む人々の姿も点在します。永遠のものではなく、万物は絶えず変化を繰り返すのだという仏教の思想を、大観は、水の流れにたとえて表現しました。

《^{どうてい}洞庭の夜》大正 10 年頃/ c.1921 横山大観記念館蔵



中国の湖南省北部に位置する洞庭湖は、古くから山水画に描かれてきた景勝地です。明治 43 年、中国を旅行した大観はこの湖の近くを訪れており、その体験が本作品に生かされたものと思われます。絹本に淡く美しいぼかしが広がる、大正期の大観に特有の幻想的な作風となっています。

《^{みみずく}木菟》大正 11 年/ 1922 横山大観記念館蔵

かつて大観邸の庭には竹林があり、ミミズクがよく訪れていたと伝えられています。この作品にはそうした日常の光景が描かれているのでしょうか。ミミズクは光る眼でじっとこちらを見据え、静かな中にも緊迫した空気が漂います。笹の葉叢の奥には、細い三日月も覗かれます。



あんず
《杏》(未完) 大正 13 年/ 1924 横山大観記念館蔵

杏の鮮やかなオレンジ色が目をひく作品です。濃淡を駆使して、梅雨時のしっとりとした空気感も表現されました。葉の上にはカタツムリも描かれており、その繊細で緻密な描写には、身近な自然をひたむきに写生する姿が伺われます。大正期の細密表現を代表する作品です。



大日本雄辨會講談社刊『大正大震災大火災』大正 12 年/1923

表紙絵：横山大観

《生々流転》が出品された再興第 10 回日本美術院展の初日(9 月 1 日)、会場は関東大震災に見舞われました。大観が長大な絵巻を出す、との前評判があったために、会場には大勢の来館者が押し寄せていました。そこに思わぬ大地震の襲来で、壁に掛けられた作品は木の葉のように舞い、彫刻は台座ごと倒れたといひます。大混乱のなか、大観は《流転》を自ら運び出しました。



倒壊を免れた大観邸は、一時期、「臨時下谷郵便局」として明け渡されました。また大観は、講談社の創業者・野間清治の依頼で、震災の被害記録などを集めた『大正大震災大火災』の表紙絵(原画は講談社野間記念館所蔵)を描きました。装丁画という、大観芸術の違った一面を見られるとともに、大観と社会とのつながりも知ることのできる貴重な作品です。

りゅうこうしめいにおどる
《龍蛟躍四溟》【複製】昭和 11 年/1936 横山大観記念館蔵



第 1 回帝国美術院展の出品作《龍蛟躍四溟》(展覧会終了後、皇室に献上。現在は宮内庁三の丸尚蔵館所蔵)の複製で、大塚巧藝社により制作されたものです。

大正 15 年、大塚巧藝社の社長・大塚稔が開発した、コロタイプ印刷による精巧な複製を「巧藝画」といひます。実業家であり美術コレクターでもあった大倉喜七郎が、自身の所有する大観作品をひろく一般国民に鑑賞してもらいたい、との希望を大塚に相談したことから、同社の複製画制作への試みが始まりました。「巧藝画」の開発により、国民の各家庭で、日本画を身近に楽しむことができるようになりました。

◎お知らせ

・学芸員によるギャラリートーク

会期中の毎週日曜日、午前11時より30分程度

先着20名（午前10時より希望者に受付で整理券配布）

・館長によるギャラリートーク

7/21, 28, 8/4, 11, 18 午前11時より30分程度

先着20名（午前10時より希望者に受付で整理券配布）